

枕草子

「少納言よ かうろほうの雪 いかならん」

小 倉 肇

一

枕草子「香炉峰の雪」(三巻本二八二段)は、清少納言の才知や人柄を語る逸話として、また中宮定子のサロンのありようをうかがうことのできる章段として、あまりにも有名である。有名であるだけに、この章段によって、清少納言や中宮定子を象徴的に描き出そうとする傾向のあることは否めない。研究者は独自の解釈を提示しようとするあまり、かなり多くの異説が存在することとなり、事実上の定説と目されるような解釈は、実は見あたらないと言つてよい。本稿の目的は、枕草子「香炉峰の雪」の章段について、本文のことば(表現)に即して検討しつつ、「解釈上の問題点」をも踏まえながら、従来の諸説とは全く異なつた、新しいテクスト解釈の提示を行うことにある。

まず、田中重太郎『校本枕冊子』下巻によつて、(三巻本)の本文を掲げておく。

雪のいとたかう降たるを れいならず みかうしまいりて すひつに火をこして ものかたりなとしてあつまりさふらふに
少納言よ かうろほうの雪 いかならんと おほせらるれば みかうしあけさせて みすをたくあけたれば わらはせ給

枕草子「少納言よ かうろほうの雪 いかならん」

人くも さることはしり 歌などにさへうたへと おもひこそよらさりつれ 猶 此宮の人には さへきなめりといふ

一一

「例ならず 御格子まゐりて」は、従来から異説の多く見られる箇所、『枕草子大事典』(二〇〇一)にも「解釈上の問題点」として、三保忠夫(一九九二)による三種の整理を掲げている。

①雪が積もったときには雪見のために格子を上げるのが例なのに、下ろしたままである。②朝には格子を上げるのが例なのに、下ろしたままである。③夕には格子を下ろすのが例なのに、いつもより早く格子を下ろした。①が通行の説である。三保は、格子の上げ下げは毎日の恒例であつて、風流に優先するはずであるから、①の状況が許されるはずはないとする。③については、一旦は格子が上げられたのだから、女房達は既に雪を見ており、定子の下問は気の抜けたものとなつてしまうなどの理由から採れないとし、②と結論づけている。

①の「雪が積もったときには雪見のために格子を上げるのが例」だとする(通行説)は、次のような章段から見るとかぎり成立しそうにない。

(1)雪のいと高うはあらで、うすらかに降りたるなどは、いとこそをかしけれ。また、雪のいと高う降りつもりたる夕暮より、端近う、おなじ心なる人三三人ばかり、火桶を中にすゑて物語などするほどに、暗うなりぬれど、こなたには火もともさぬに、おほかたの雪の光いとしろう見えたるに、火箸して灰など掻きすさみて、あはれなるもをかしきもいひあはせたるこそをかしけれ。(枕・雪のいと高うはあらで)

この章段によれば、雪の「うすらかに降りたる」状態が「いとをかし」なのであつて、「雪のいと高う降りつもり

たる」時の「雪見」がよいとは考えにくいからである。ここで、「雪のうすらかに降りたる」のように書き出さないで、「雪のいと高うはあらで」と表現しているのは、そのような状態が好ましくないことを当然のことながら含意している。そして、「雪のいと高う降りつもりたる夕暮れ」という、そんな好ましい状態ではない時（風流な景色ではない時）でも、「雪の光」の中で「あはれなること」「をかしきこと」などを話し合っているのが「をかし」ということである。また、三保忠夫の指摘するように「格子の上げ下げは毎日の恒例であつて」も、諸事情（風流を含めて）によつて、格子を上げたまま（①②参照）、下げたまま（③参照）、にしておくことは結構あつたと見なされる。

②夜中暁ともなく、門もいと心かしこうももてなさず、なにの宮、内裏わたり、殿ばなる人々も出であひなどして、格子などもあげながら、冬の夜をお明かして、人の出でぬるのちも見いだしたるこそをかしけれ。（枕・宮仕人の里なども）

③暁にはとく下りなんといそがるる。「葛城の神もしばし」など仰せらるるを、いかでかはすぢかひ御覽ぜられんとて、なほ伏したれば、御格子もまゐらず。女官どもまゐりて、「これ、はなたせ給へ」などいふを聞きて、女房のはなつを、「まな」と仰せらるれば、わらひて帰りぬ。（枕・宮にはじめてまゐりたるころ）

従つて、三保忠夫とは異なつた理由で、〈通行説〉は否定されることになる。すなわち、「折角の雪景色なのに、まだ日もあるうちに格子を閉め切つてしまった」（萩谷朴一九八三）という解釈は成り立たないことになる。もし、〈通行説〉が、この「香炉峰の雪」の章段から導き出されたものであるとすれば、それは「香炉峰の雪」の章段のある解釈から導き出されたものであり、一般性を持つものではないことは明らかだからである。

ところで、〈通行説〉は、いわゆる〈三卷本〉や〈能因本〉では成立するとしても、実は〈前田本〉では成り立たないのであつて、このことは特に留意しなければならない。

(4)雪のいたう降りたるを、例ならず、御格子も参らで（前田本）⁽¹⁾

この〈前田本〉に従えば、「雪がたいそう降っているのに、いつもとは違って、御格子もお下げしないで」ということになる。すなわち、〈前田本〉によれば、「大雪」などの時は、御格子を下ろすのが通例であることを含意していると解される。やはり「大雪」の時には、（雪見などをしないで）格子を下ろしていたと考えるべきであろう。このように考えるならば、「雪のいと高う降りたるを、例ならず、御格子参りて」（三卷本）は、「雪のいと高う降りたる」状態が、「折角の雪景色」の状態ではないのであるから、「雪がたいそう高く降り積もっているのに、いつもとは違って、御格子をお下げして」という解釈になるはずであり、助詞「を」は、「逆接」ではなくて、「順接」の意味として捉えるべきことになる。この助詞「を」については、従来の注釈書では、例外なく「逆接」に解釈しているのであるが、これは〈通行説〉に従った必然的な結果であった。なお、三保忠夫（一九九二）は、「この「を」は、まゝ間投助詞的性格を帯びて用いられる助詞である」として、

「雪のいとたかう降」るとはたいそうな積雪を意味し、「…たるを」には、この朝、そうした結果・状態を発見した新鮮な感動、および、重大さの認識がこもっているようにみうけられる。今の場面は、こうした感動のいまださめやらぬ時分の出来事ではなからうか。

という独自の見解を提示している。ここで「重大さの認識」とは、「格子を上げ、雪見を行うにも十分の頃合い」であるにもかかわらず、「格子は下りて」いて、「女房たちは炭櫃を囲んでおしゃべりに余念がない。若い中宮にとつては、決して好ましい状況ではなかった」（三保忠夫一九九二）ということである。「大雪だ！ それなのに」ということで、感動と逆接が表現されている、と考えているのであるから、結局は、助詞「を」を「逆接」の意味に解釈してい

ることに変わりはない。因みに、この「感動」が、もし「雪のいと高う降りたるを」の箇所で表されているとすれば、それは、文脈の意味、すなわち、例えば「昨日までとは違って」というような背景があつてのことであるから、「を」に「感動」の意味があるわけではない。この助詞「を」は関係標示の機能を担っていると見るべきである。

二三

ところで、外の雪（雪景色）を中宮定子は、なぜ「香炉峰の雪」と言ったのであろうか。注釈書類では、白氏文集の詩を引用し、「香炉峰」の地理的な説明をしているのが一般的であるが、その中で、萩谷朴（一九八三）は、次のようにやや突っ込んだ説明をしている。

ここは日本の平安京である。シナの江西省吉安府万安县にある廬山の北嶺である香炉峰の雪が見えよう道理はない。勿論、中宮は香炉峰の雪そのものを見たいとおっしゃったのではない。折角の雪景色なのに、まだ日もあるうちに格子を閉め切ってしまったので、婉曲に注意されたのである。（中略）「中宮が第一句の「日高ク」と第二句の「寒サヲ怕レズ」とを踏まえて、格子を上げることが望んでいらっしやる。

清少納言の漢詩の知識を試すためではなく、格子を閉め切ってしまったことに対して「婉曲に注意する」ために、「見えよう道理」のない「香炉峰の雪」とおっしゃった、ということの説明している。雪見がしたので、下ろしてある「格子を上げよ」ということを、白氏文集の詩で「婉曲に注意」した、ということである。この考え方を、さらに進めたのが、三保忠夫（一九九二）である。

中宮が目覚められた時分、あるいは、御帳からお出ましになった時、伺候する女房の誰かが、まず、告げたのであろう、「今朝は大雪でございますわよ!」……と。「……まあ、それは大変!」と朝寝坊をはじらいながら、しかし、心躍らせながら出てこられた中宮であったが、そうした彼女の眼に映った情況とは、どのようなものであろうか。時、既に、格子を上げ、雪見を行うにも十分の頃合いではあった。しかし、格子は下りている。夜來の灯のもと、女房たちは炭櫃を囲んでおしゃべりに余念がない。若い中宮にとつては、決して好ましい情況ではなかったであらう。女房たちを直にいさめるのは野暮^{やぼ}たく、興醒めであらう。「香炉峰の雪いかならん」とは、即興的な風流に托した中宮の婉曲ないさめのことばであり、かつ、格子を上げよとの意思表示でもあった。この時、中宮が、『文集』の詩を用いたのは、朝寝坊したわが身を、つい、白居易に重ね、なぞらえてしまったからであらう。

三保忠夫は、「香炉峰の雪」だけを踏まえているのではない、という萩谷の見解をさらに発展させ、「朝寝坊したわが身を、つい、白居易に重ね、なぞらえて」中宮がこの白氏文集の詩を用いた、としている点が、従来にない新しい解釈である。萩谷朴は、第一句の「日高ク」を踏まえるとするが、白詩文集の「日高ク」は朝方、遅くても昼前であり、夕方、或いは午後ではないので、「まだ日もあるうちに」という解釈とは齟齬^{そご}を来している。また、三保忠夫は、中宮が「朝寝坊したわが身を、つい、白居易に重ね、なぞらえてしまった」とするが、白居易のこの詩は、左遷され、詩を作つて楽しむために廬山の麓に、草堂（草葺きの家）を建て、名誉欲をいっさい捨てて、この地で老後を送るのも悪くない、という内容であるから、三保忠夫の言うように詩全体をよく理解し、熟知していたとすれば、「つい」とは言え、自分を白居易になぞらえることは、恐らくあり得なかったであらう。やはり、三・四句の第四句だけを踏まえていると考えるのが妥当である。

さらに、萩谷朴・三保忠夫の考え方は、〈三卷本〉へ能因本〉では可能であるが、〈前田本〉では成立しないことに

留意しなければならない。すなわち、「前田本」では、「御格子」は下ろされていいからである。「三卷本」へ能因本と「前田本」とで、この章段のテーマに相違がないとすれば、「香炉峰の雪いかならん」という、「即興的な風流に托した中宮の婉曲ないさめのことばであり、かつ、格子を上げよとの意思表示でもあった」という三保忠夫の解釈は成り立たないことになる。なお、萩谷朴も三保忠夫と同様「中宮の婉曲ないさめのことば」とするが、三保忠夫が「格子を上げよとの意思表示でもあった」とする点では、萩谷朴は「御簾をかがげよ」と中宮のご意向とする説に賛意を示していて、解釈に食い違いがある。ただし、「格子を上げることを望んでいらつしやる」とも解釈しているので、三保忠夫と同じ見解であるとも考えられる。ただし、結果的には「雪見をしたい」ということ、同じになるにせよ、「格子を上げよ」と「御簾をかがげよ」とは、同じではないはずである。

四

源氏物語の総角に、白氏文集の「香炉峰の雪」を踏まえた場面がある。

(5)雪の、かきくらし降る日、ひねもすにながめ暮らして、世の人の、すさまじきことにいふなる、十二月の月夜の、曇りなくさし出たるを、簾垂まきあげて見給へば、向ひの寺の鐘のこゑ、枕をそばだてて、「今日も暮れぬ」と、かすかなる響きを聞きて

おくれじと空ゆく月を慕ふかな 遂にすむべき此の世ならねば

風の、いと、はげしければ、薔おろさせ給ふに、四方の山の鏡と見ゆる汀の氷、月影に、いと、おもしろし。

「京の家の、『かぎりなく』と磨くも、え、かうはあらぬぞや」と、おぼゆ。「わづかに生き出て、物し給はましかば、もろともに聞えまし」と、思ひ続くるぞ、胸よりあまる心地する。

枕草子「少納言よ かうろほうの雪 いかならん」

八

恋わびて死ぬる葉のゆかしきに 雪の山にや跡をけなまし

「なかばなる偈、教へけん鬼もがな。ことつけて投げん」と思すぞ、心ぎたなき聖心なりける。(源・総角)

薫は大君の死で悲嘆にくれ、京にも帰らず、宇治の八の宮邸に閉じこもっている場面であるが、白氏文集の詩との対応関係を見ると、次のようになる。「雪が降り続き、それを一日中眺めていた日」「日高く睡り足りて猶起くるに備し」、「京」「長安」、「宇治」「廬山の下」、「京の立派な家」に対し「八の宮邸(都)」「草堂」、「四方の山・雪の山」「廬山」。描かれている状況を見ると、その置かれた身の上、境遇は全く異なっているが、この場合ならば、薫と白居易は重ねられていると見てもよいであろう。それはともかく、ここで注目されるのは、宇治の雪を頂いた四方の山↓廬山(香炉峰の雪)↓雪の山(雪山・ヒマラヤ山脈)という文脈である。いずれも雪を頂いた高い山であり、そこに「高い」が含意されていることは見逃せない。

五

ここで、御簾を上げる動作について、少し見てみよう。本文では「みすをたくくあけたれは」となっている。

(6) 関白殿、黒戸より出でさせ給ふとて、女房のひまなくさぶらふを、「あないみじのおもとたちや。翁をいかにわらひ給ふらん」とて、分け出でさせ給へば、戸にちかき人々、色々の袖口して、御簾ひき上げたるに、権大納言の御沓とりてはかせ奉り給ふ。(枕 関白殿、黒戸より出でさせ給ふ)

(7) ものはいはで、御簾をもたげてそよとさし入るる、呉竹なりけり。「おい、この君にこそ」といひわたるを聞きて、(枕・五月ばかり、月もなういとくらきに)

(8) 朝顔の露おちぬさきに文かかむと、道の程も心もとなく、「麻生の下草」など、くちずさみつつ、我がかたにい

くに、格子のあがりたれば、御簾のそばをいささかひきあげて見るに、おきていぬらん人もをかしう、露もあはれなるにや、しばしみたてれば（枕・七月ばかりいみじうあつければ）

いずれも、「御簾」を引き上げたのは、(6)では閑白殿が通れる程度に、(7)(8)では少し持ち上げる程度である。一方、次の(9)は、夏の夜の場面で、簾が「高く上げてある」のと「下ろしてある」のと対照的に描かれている。

(9)燈籠に火ともしたる、二間ばかりさりて、簾高うあげて、女房二人ばかり、童など、長押によりかかり、また、おろいたる簾にそひて臥したるもあり。火取に火深う埋みて、心ぼそげににははしたるも、いとどのやかに、心にくし。（枕・南ならずは東の）

(10)廂の簾たかうあげて、長押のうへに、上達部はおくにむきてながとゐ給へり。そのつぎには、殿上人・若君達、狩装束・直衣などいとかしうて、えゐもさだまらず、ここかしこにたちさまよひたるもいとをかし。実方の兵衛の佐、長命侍従など、家の子にて今すこしいで入りなれたり。まだわらはなる君など、いとをかしうておはす。（枕・小白河といふ所は）

この(10)は、六月十日過ぎの経験したことのない暑い日のこと、風通しをよくするために「廂の簾」を高く上げていゝる。因みに、簾が高く上がっていないと、ここに描かれているような描写はできない。なお、「車の簾」の場合も、(11)下簾もかけぬ車の、簾をいと高うあげたれば、奥までさし入りたる月に、薄色・白き・紅梅など、七つ八つばかり着たるうへに、濃き衣のいとあざやかなる、つやなど月にはえて、をかしう見ゆる（枕・十二月廿四日、宮の御仏名の）

のように、月を眺めるためには、簾を高く上げることもあった。御簾にかかわる動作は、基本的には「上げる」「下ろす」である。表現に注目するならば、清少納言が「御格子あげさせて 御簾を高くあげ」た、その「高く」とい

う、表現・行為は、特に留意する必要がある。もし中宮の意向が「格子を上げよ」あるいは「御簾をかかげよ」ということであるならば、わざわざ清少納言は御簾を「高く」上げることはないからである。「高く」上げる行為が意味するところは、単に「雪景色がよく見えるように」ということではなくて、「香炉峰の雪」すなわち「高い山の雪」だから、「仰ぎ見る」必要があるわけで、そのために「高く」上げたと解釈するべきであろう。現行の注釈書類はこの「高く」に注意を払っていないが、恐らく、「よく見えるように」という解釈をしているのであろう。しかし、単に「御簾」を上げるという動作を強調した表現ではないと考える。

六

本文「さることは知り、歌などにさへ歌へど 思ひこそ寄らざりつれ」とある「思ひも寄らなかつた」こと、つまり意表を付かれた点について考えてみる。萩谷朴（一九八三）は、(A)「さる言」即ち「撥^{ヤチ}簾^ヲ看^ミ」という白詩そのものとするⅡ評釈・全講、(B)「さる言」即ち、白詩を踏まえて御簾をかかげる機転とするⅡ旺文、(C)「御簾をかかげよ」との中宮のご意向とするⅡ全解・角文・集成、という三つの説に纏め、(C)説に賛意を表している。しかし、中宮の意向が「御簾をかかげよ」ということであれば、清少納言は単に「御簾を上げる」だけでいいわけであるが、清少納言は、実際には「高く上げ」ている。この「高く」は、既に述べたように、やはり意図的な動作と考えざるを得ない。従って、「思ひこそ寄らざりつれ」とは、御簾を「高く」上げる、という行為に対してであったと考えられる。「香炉峰の雪」を仰ぎ見るために「高く」御簾を上げたわけであり、そのような「高く上げる」ことに、思い付かなかったのである。すなわち、清少納言の「高く上げた」ことに意表を付かれたもので、「格子をあげよ、御簾をあげよ」という中宮のメッセージを思い付かなかったわけではない。

「思いこそ寄らざりつれ」は、従来の解釈では女房たちの反省の言葉とするが、単なる反省ではなく、「御格子を上げさせ、御簾を上げる」ことぐらい、私たちにも出来た、という含みを持たせた表現であると解される。そうでなければ、女房としての教養のなさを単にさらけ出した表現になってしまうことになるからである。その場にいる女房たちも、中宮の「香炉峰の雪、いかならむ」というメッセージの意味は、即座に理解できたであろう。すなわち、「香炉峰の雪」から、直ちに白氏文集の「簾をにかけて看る」の句が引き出され、「御格子を上げさせて」、「御簾を上げる」ことは、中宮に仕えているほどの女房ならば、誰でも理解できたものと考えられる。名指しをされれば、「御格子を上げさせ、御簾を上げる」ことができる程度の知識や行動力はあったと考てよい。従来のように、「御格子を上げさせ、御簾を上げ」たことについて、清少納言が特別であったと考える必要はないであろう。

以上のように考えてくると、中宮の「笑わせたまふ」と「人々も」の表現も氣に掛かる。もし、現行の注釈書のよ
うに、中宮の「笑わせたまふ」が「にっこり・微笑」のような「満足の笑み」であれば、「ゑませたまふ」の方がふさわしいと考えられるからである。たしかに、枕草子などの用例を検討すると、「笑う」と「ゑむ」の意味は連続しているが、それは、現代語でも同様である。ただし、現代語では、(14)のような「笑みたる声」のような表現はない。(12)せばくて、わらはべなどののぼりぬるぞあしけれども、屏風のうちにかくしすゑたれば、こと所の局のやうに、
声たかく笑らひなどもせで、いとよし。(枕・内裏の局、細殿いみじうをかし)

(13) あることあらがふ、いとわびしうこそありけれ。ほとほと笑みぬべかりしに、左の中將の、いとつれなく知らず顔にてゐ給へりしを、かの君に見だにあはせば、笑らひぬべかりしに、わびて、台盤の上に、布のありしをとりて、ただ食ひに食ひまぎらはししかば、中間にあやしの食ひものやと、人々見けむかし。(枕・里にまかでたるに)
(14) 「かうなむいふ。なほそこもと教へ給へ」とのたまひければ、笑らひて教へけるも知らぬに、局のもとにきてい

みじうよく似せてよむに、あやしくて、「こは誰そ」と問へば、笑みたる声になりて、「いみじきことを聞えん。かうかう、昨日陣につきたりしに、問ひ聞きたるに、まづ似たるなり。（枕・故殿の御服のころ）

この「香炉峰の雪」の章段の「笑ふ」は、典型的な「ゑむ」の側ではなく、やはり「笑ふ」本来の「声を上げて笑った」と捉えるべきであろう。すなわち、「御簾を高く上げた」ことに意表をつかれ、思わず「笑って」しまったわけで、単なる「満足の笑み」だけではなかった。「満足」と同時に可笑しさの笑いでもあったはずである。とすれば、次の「人々も」「も」の含みは、「中宮様も」ということであつたと考えられる。中宮様も「思いこそ寄らざりつれ」だつたわけで、それを、中宮の「笑う」と「人々も」で表現していると解されるのである。

七

以上のような見解を踏まえて、更に、従来全く考えられていなかった解釈の可能性について、新たに検討を進めてみたい。

(15) 少納言よかうろほうの雪 いかならん（『校本枕草子』『三卷本枕草子本文集成』）

「かうろほう」は諸本仮名書きで、異文は存在しない。原本も仮名書きであつた可能性が極めて大きい。従つて、「香炉峰」という漢字表記を知らなかつたとは考えにくいので、漢字を宛ててしまうと都合が悪かつたと考える余地が残されている。つまり、「香炉峰」と漢字を宛てると中国の「香炉峰」の意味だけに限定されてしまうので、それを避けた可能性があるということである。

ここで、本文の「雪のいとたかう降たるを」「みすをたかくあけたれは」の「高う（く）」に注目するならば、「かうろほう」の「かう」は、「高（かう）」と「香（かう）」を重ねるために、あえて仮名書きにされていると解釈するこ

とができる。中国字音を見ると、「香」は、『広韻』許良切・陽韻曉母三等(ㄒㄩㄥ)であり、「高」は、『広韻』古勞切・豪韻見母一等(ㄏㄠ)である。日本字音のレヴェルでは、香≡[kau]と高≡[kau]として、韻尾の鼻音性の有無で区別されていたが、当時の和文(日本語音)のレヴェルでは(漢語の音でも)「香」と「高」はいずれも「かう[kau]」で区別がなかった可能性が大きい。

(16) あさちかうのはなりにけり 白露のおけるくさはも色かはりゆく(古今・四四〇〈物名〉きちかうの花 ともり)

「秋近う野はな」の箇所「桔梗の花」が重ねられているのであるが、この場合も、「梗(かう)」は、『広韻』古杏切・梗韻見母二等(ㄎㄥ)で、ウ音便形「近う」の「かう[kau]」と同じ文字で把握されている⁽²⁾。

このように考えてみると、枕草子の「かうろほう」は確かに白氏文集の「香炉峰」であることに違いはないが、「かう」の箇所に「高」が重ねられ、表現されていたとしても不自然ではない。すなわち「香炉峰」は「高炉峰」でもあったということである。言い換えれば、「雪のいと高う降りたる」ので、中宮は、「香炉峰」の「かう」に「香」と「高」を重ねて、「かうろほう」と表現した。それを受けて、清少納言は、「香炉峰」≡「高炉峰」と理解し、高く降り積もっている雪を見るために、「御簾を高くあげた」ということになる。

八

さて、ここで、「香(高)炉峰の雪」が、単なる雪景色ではなく、庭にできた「雪の山」を指しているという可能性について考えてみたい。これには、次の章段が考え合わせられる。

(17) さて、師走の十よ日の程に、雪いみじう降りたるを、女官どもなどして、縁にいとおほく置くを、「おなじくは、庭にまことの山を作らせ侍らん」とて、侍召して、「仰せごとにて」といへば、あつまりて作る。主殿寮の

官人、御きよめにまゐりたるなども、みな寄りて、いとたかう作りなす。宮司などもまゐりあつまりて、言くはへ興ず。(枕・職の御曹司におはします頃、西の廂にて)

(18)さて、その山作りたる日、御使に式部丞忠隆まゐりたれば、褥さしいだしてものなどいふに、「けふ雪の山作らせ給はぬところなんなき。御前のつばにも作らせ給へり。春宮にも弘徽殿にも作られたりつ。京極殿にも作らせ給へりけり」などいへば、

ここにのみめづらしとみる雪の山所々にふりにけるかな

と、かたはらなる人していはすれば、(枕・職の御曹司におはします頃、西の廂にて)

「雪山」の章段として有名な箇所である。雪がたいそう降ったので、女官たちが雪かきをして縁先に雪の山ができてしまったことが知られる。そして、さらに、どうせなら「庭に本當の雪山(大きくて高い山)を作らせる」ために、侍を呼んで、中宮の「仰せごと」ということで、庭に「雪山」を作っている。この雪山は「いとたかう作りな」したものであった。この雪山を作った日は、余所でも皆作ったようで、使いとして参上した忠隆が「けふ雪の山作らせ給はぬところなんなき」と言っている。雪がたくさん降り積もった時には、雪かきで「雪の山」は出来るし、また、このように大規模でなくとも、庭に「雪山」を作ることがあったことは、想像に難くない。従つて、中宮定子の言つた「香炬峰」は、庭に出来た實際の「雪山」を指していることも十分考えられるのである。とすれば、中宮定子は、庭の「高い雪山」を「香(高)炬峰の雪」と洒落た言い方をした、と解釈することができそうである。中宮定子の庭の「高い雪山」を「香(高)炬峰の雪」と見立てる洒落た言い方を受けて、清少納言は、高い雪山だから、「御簾を高くあげ」て、その雪山の峰(頂上)までも見えるようにした、仰ぎ見るようにしたというわけである。従つて、「思いも寄らなかつた」のは、庭にできた實際の「高い雪山」(すなわち「香(高)炬峰の雪」)を見るために、「御簾を高くあ

げ」たこと、を意味していることになる。

九

ところで、「香（高） 炉峰」が、「雪山」の章段の、侍に作らせた「高い雪山」を、実際に指しているとしたら、「かうほうの雪」の章段の解釈は、また、大きく変わってくる。

(19) 「これ、いつまでありなん」と人々にのたまはするに、「十日はありなん」「十よ日はありなん」など、ただこの頃のほどを、あるかぎり申すに、「いかに」と問はせ給へば、「正月の十よ日までは侍りなん」と申すを、御前にも、えさはあらじとおぼしめしたり。女房はすべて、年のうち、つごもりまでもえあらじとのみ申すに、あまりとほくも申しけるかな、げにえしもやあらざらむ、一日などぞいふべかりけると、下には思へど、さはれ、さまでなくとも、いひそめてんことはとて、かたうあらがひつ。二十日の程に雨降れど、消ゆべきやうもなし。すこしたけぞ劣りもて行く。「白山の観音、これ消えさせ給ふな」といのるも、ものくるほし。……さて、雪の山、つれなくて年もかへりぬ。一日の日の夜、雪のいとおほく降りたるを、「うれしうもまた積みつるかな」と見るに、「これはあいなし。はじめの際をおきて、いまのはかき棄てよ」と仰せらる。（枕・職の御曹司におはします頃、西の廂にて）

高橋和夫（二九九〇）によれば、「この段【香炉峰の雪】の史実年時は確定できない。一応、八七段の雪の山の段が、長徳四年（九九八）の師走から翌長保元年正月のうち、師走十余日の「雪いみじう降りたる」と、本段の「雪のいと高う降りたる」とを同日とすることも出来るが、ここでは他の年であつたとしてもよい」とのことであるが、本稿の筆者は、以下に述べるように「香炉峰の雪」の章段は、「一日の日の夜、雪のいとおほく降りたる」夜の出来事

であった可能性を考えている。

中宮の「これ、いつまでありなん（この雪山は、いつまで消えずにあるかしら）」という問いに、女房たちは「十日はありなん」「十よ日はありなん」など十日間ほどを答えているのに、清少納言は「正月の十よ日までは侍りなん」と、年明けの中旬までであるでしょうと答えて、いわば「賭」をしている。「雪山」がどうなっているか、中宮も、女房たちも大いに気にかけているのである。従って、元日の「雪のいとおほく降りたる」夜の出来事が「香炉峰の雪」の章段で描かれている可能性は大きいと考えられる。

「香炉峰」が、この章段に書かれている「雪山」であると仮定してみよう。「香炉峰」が、この「雪山」であるならば、侍に造らせた、庭の大きく高い「雪山」を「香（高）炉峰の雪」と洒落た言い方（言葉）で、中宮は、その「雪山」の様子を尋ねた。そこで、清少納言は「御簾を高くあげる」という洒落た動作（行為）で、「大雪で、雪山は、もっと高くなっていますよ。嬉しいことです。全く消える気配はありません。私の言った通りになりそうです」というメッセージを中宮に伝えた、ということになる。従って、中宮の「笑い」は、そのメッセージを理解した「笑い」と解されることになる。ここで、問題なのは、他の女房たちは、中宮と清少納言のやりとり、そのメッセージに、いつ気付いたのかということである。恐らく、中宮が「笑った」のを受けて、他の女房たちは、中宮と清少納言のやりとり、そのメッセージに初めて気が付いたのであろう。

すなわち「思いも寄らなかつた」のは、中宮のメッセージである庭にある「高い雪山」の状態を「香（高）炉峰の雪」と洒落た言い方（言葉）をしていること、そして、その「高い雪山」を仰ぎ見るために、「御簾を高くあげ」たこと（行為）で、「大雪で、雪山は、もっと高くなっていますよ、消える気配はありません。（私のいった通りになりますよ）」という少納言の中宮へのメッセージであること、ということになる。それだからこそ、清少納言の「うれ

しうもまた積みつるかな」という言葉が生きてくるし、中宮の「これはあいなし。はじめの際をおきて、いまのはかき棄てよ」と仰ったことが理解されることになるう。

中宮定子と清少納言とのやりとりが、庭の雪山の状態についてであったことに女房たちは「思いも寄らなかつた」ということである。そして、清少納言の「御簾を高くあげ」たこと（行為・メッセージ）は、中宮にとつても意表をつかれたものであつたであらう。それが、中宮の「笑い」であつた。このことは「人々も」の「も」によつても表現されている、と解されるのである。

註(1) 前田本の本文を『校本枕冊子』によつて掲げておく。

ゆきのいたうふりたるを れいならす みかうしもまいらて すひつに火をこして ものかたりしつゝなみぬ給へれは
小納言よ かうろほうのゆき いかならんと おほせらるれば みすをたかうまきあげたれば わらはせ給 人くも さ
る事はしり うたなどにもうたへと 思こそよらさりつれ 猶 この【宮】の人には さへきなめりといふ

(2) 和歌には「漢語」「音便形」を用いないという規範に挑戦する形で、作者「とものり」は「きちかうの花」を詠み込んだわけであるが、この和歌では、その二つの規範を同時に（同一箇所）犯していることに注目したい。「きちかうの花」の「きちかう」は、漢語「桔梗」とは同じではない。「きちかう」はいわば漢字の字面から離れた、言い換えれば、日本語に馴化した語形であつて、必ずしも、本来の漢語としての硬い感じを伴つてはいなかつた。それゆえに、「物名」の題（和歌の題）として選ばれたのであらう。ただし、そうは言つても、「菊」などのような和歌のことば（歌語）ではなかつたことは確かであり、「きちかう」は、やはり「歌語」の基準からすれば、漢語の側に属していたと見なされる。一方、音便形の「近う」は、散文（仮名文）では既に用いられてはいたが、「歌語」の基準からすれば、口頭語であり、インフォーマルな感じを伴つた語形であつた。従つて、フォーマルな文章語としての漢語の側に属する「きちかう（桔梗）」とインフォーマルな口頭語としての音便形（近う）という両極にある語形を、隠し題として重ねることによつて、それを見事に調和させたところに作者の腕の見せ所があつたのである。

枕冊子「少納言よ かうろほうの雪 いかならん」

引用・主要参考文献

- 池田亀鑑（一九五七）『全講枕草子 下巻』（至文堂 昭和三三・五）
- 池田亀鑑 岸上慎二（一九五八）『枕草子』（日本古典文学大系、岩波書店 昭和三三・九）
- 太田次男（一九七四）白詩受容考——「香炉峰雪撥簾看」について——（『芸文研究』昭和四九・二）
- 岸上慎二（一九六九）『枕草子』（校注古典叢書、明治書院 昭和四四・四）
- 久保木哲夫（一九七〇）枕草子における自讃談——その表現の方法と基盤について（『言語と文芸』昭和四五・五）
- 古瀬雅義（一九九五）清少納言と「香炉峰の雪」——章段解釈と清少納言のイメージ——（『安田女子大学紀要』23 平七・二）
- 杉山重行（一九九九）『三卷本枕草子本文集成』（笠間書院 平一一・三）
- 高橋和夫（一九九〇）枕草子回想章段の事実への復原 その一（『群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編』40 平二・七）
- 田中重太郎（一九五六）『校本枕冊子 下巻』（古典文庫 昭三一・三）
- 田中重太郎・鈴木弘道・中西健治（一九九五）『枕冊子全注釈 五』（角川書店 平成七・二）
- 中島和歌子（一九九二）枕草子「香炉峰の雪」の段の解釈をめぐって（『国文学研究ノート』平三・三）
- 萩谷朴（一九七七）『枕草子 下』（新潮日本古典集成 新潮社 昭和五二・五）
- 萩谷朴（一九八三）『枕草子解環 五』（同朋舎出版 昭和五八・一〇）
- 枕草子研究会編（二〇〇一）『枕草子大事典』（勉誠社 平成二三・四）
- 松尾聡・永井和子（一九七四）『枕草子』（日本古典文学全集、小学館 昭和四九・四）
- 三田村雅子編（一九九四）『日本文学研究資料新集4 枕草子・表現と構造』（有精堂出版 平六・七）
- 三保忠夫（一九九二／一九九二）枕草子「香炉峰の雪」（上・下）（『国語教育論叢』1・2 平三・九、平四・八）
- 渡辺実（一九九二）『枕草子』（新日本古典文学大系、岩波書店 平三・二）